

ヨハネの福音書における〈信仰理解〉 ——NPP に関する議論を念頭に——

遠藤勝信

はじめに

N. T. ライトの義認論を日本の福音派は歓迎すべきか否かという議論は、ここ十数年の神学会及び教会のホット・イシューとなっている。特に米国の福音派においてライト派と反ライト派の意見の対立が観られる（英国の神学会の雰囲気とは対照的である）。東部部会としてこの問題を慎重に扱うべく、一旦ライト神学から離れ、〈信仰について〉聖書テキストから聞くことを昨今の研究会の課題としている。本論文においてはパウロ神学からも離れて、ヨハネの福音書に観られる「信仰理解」を検証する。

1. 前景 (foreground) と後景 (background)

1) 平面ではなく、立体的に

聖書には、主張が一見矛盾（もしくは対立）しているように思える議論がある。ヤコブの手紙とガラテヤ人への手紙の ἔργον と πίστις、テサロニケ人への手紙第一と第二の〈やがて〉と〈いま〉の終末論、πίστις Χριστοῦ の解釈（〈主格属格〉か〈目的格属格〉か）等。ライトの義認論に関して言うならば、義認は〈共同体（神の国）〉の問題か〈個〉の問題か、〈いま〉か〈やがて〉

かというものもある¹。しかし、答えは＜あれかこれか＞であるより、それぞれの文脈（歴史、神学的議論、Narrativeの展開等）における前景と後景として理解することで、つまり平面ではなく立体で観ることで解決できる側面もあるのではないか。本発表においては、ヨハネの福音書における信仰理解をそのような視点で扱う。

2) 前景と後景の相対的価値

その場合、＜前景 (foreground)＞と＜後景 (background)＞の関係性をどのように観るのかということが問題となる。それは、テキストがその文脈において何を＜前景＞とし、何を＜後景＞としているのかが問題となるのであり、それは必ずしも相対的価値を意味しない。後景に退いた概念の幾つかは、テキストの文脈において価値が認められないのではなく、むしろ議論の前提理解としての役割を担っているかも知れないからである。つまり、前景は後景を否定、若しくは無視しているとは限らないという理解が必要である。その上で、それぞれの文脈と文脈において focus されているものが何かを問い、複眼的に見つめる釈義の在り方が求められる。

3) 聖書テキストと歴史的文脈

文学批評の観点からすると、テキストと歴史との関係を問うことはナンセンスかも知れない。文学批評の当初の使命は、テキストを歴史を覗く窓としてしか扱って来なかった近代以降の歴史批評学を乗り越えることにあったからである。文学批評において、テキストは外部に対しては閉ざされた意味空間として扱われる。そこでは、聖書テキストと歴史との関係を問う場がない。しかし、テキストが実際の歴史の只中で生み出された以上、その繋がりを無視する訳にはいかない。近年、文芸批評において、テキストの歴史性＜historicity＞についての議論が起こっているのは、かつての文学批評がその理論構築において純粋

¹ ライトは前者を 'anticipated justification' と呼び、後者を 'final justification' と呼ぶ。これまでの義認論では前者に着目してきたのに対し、ライトは寧ろ後者において＜義認＞を論じている。

形を追求し過ぎたことへの反動であると思われる。ここでも問われるのは＜あれか、これか＞の議論である。テキストを＜窓＞と見るのか、それとも＜鏡＞と見るのか。しかし、＜窓としても、鏡としても＞という両眼的発想が求められるのではないだろうか。

そこで問題となるのは、聖書テキストの解釈に有意味な歴史的情報を何処に求めるのか、である。20 世紀以降の新約聖書学においては、ギリシア・ローマ世界の文献のみならず第二神殿期のユダヤ教文書が、聖書テキストの歴史的背景を知る手掛かりとされてきた。初期の頃はミシュナー（トーラーの注解）やタルムード（トーラーとミシュナーに関する伝承集）、続いてミドラシ（旧約聖書注解）とタルグム（アラム語訳の旧約聖書で、その翻訳とともに欄外に書き込まれた聖書注解が当時の聖書理解を知る手掛かりとなっている）が注目されたが、近年では＜偽典 (Pseudepigrapha)＞と一括りにされるユダヤ教文書（その多くは聖書原語以外の言語で伝承）や死海文書からの引用が目立つ。

＜パウロ神学の新しい視点 ('New Perspective on Paul,' 以後、NPP)＞の議論も、それらのユダヤ教文書から得た歴史的情報に基づいている。NPP に対する一つの問いは、それらの歴史資料とパウロのユダヤ教理解との関係理解である。聖書テキストと歴史的情報とを繋ぐものとは何かを問うことなしに、後者を前者の背景とする議論は反論者を十分に納得させるに至らない。そこで重要になるのは、聖書外資料からの歴史情報と、聖書テキスト（をスクリーンとして）に映し出される歴史情報とを比較し、その関連性を丁寧に示すことであろう。そこに歴史批評と文学批評との接点を見出すことが可能なかもしれない。

二つ目の問いは、第二神殿期のユダヤ教の多様性をどのように受け止めるのかである。参照される文書は、年代が紀元前 3 世紀から紀元後 2 世紀に亘る文書群であり、地域ではパレスチナから地中海沿岸に広がる範囲である。確かに、時代と地域を越えた何らかの普遍的理解もあるに違いない (E. P. サンダースは, Covenantal Nomismこそ普遍的理解と主張) が、その多様性と個別性にも注意を払う必要がある。例えばイエスが活動した地域（紀元後 1 世紀前半のパレスチナ）と、パウロが活躍した地域（紀元後 1 世紀中期の小アジア、ギリシア、ローマ）、及びヨハネが活躍した地域（紀元後 1 世紀後半の小アジア）に

おけるユダヤ教の形態や神学は決して一様であるはずがない。

2. ヨハネの福音書における＜信仰理解＞

はじめに

本論文が焦点を当てるのは、ヨハネの福音書における＜信仰理解＞である。NPP の理解では、義認の中心は、＜神と個人との間に結ばれる契約関係＞以上に、＜神とイスラエルの間に結ばれた契約のメンバーシップへ入ること＞が強調される。また、＜イエス・キリストに対する個人の信仰＞より、＜イエス・キリストの真実＞が、＜個＞よりも＜共同体＞が、＜個人の実存に関わる事柄＞より＜神の国の事柄＞に関心を向けるべきことが促される。

個より共同体へという強調点のシフトは、18 世紀後半から欧州で展開した「歴史実証主義」に観られる。A. リッチェルはシュライエルマッハーのようなく個人主義的宗教意識＜より、＜共同体としての教会の意識＞に基づく神学を展開した。E. トレルチを経て、ドイツを中心に展開した宗教史学派の福音書に対する歴史批評学的研究においては、＜～共同体＞という言い方が一般的となる。その影響もあって、ヨハネの福音書においても＜個＞より＜共同体＞の視点が強調され今日に至っている。

一方、R. ボウカムはヨハネにおける救済論の 'Individualism' について論じている²。既に述べたように、20 世紀後半の神学、福音書の様式史批評研究、及びここ数十年の社会科学批評による福音書研究において＜共同体＞の視点が強調され過ぎてきた観がある。しかし、ヨハネによる福音書において、何故これ程までに＜個＞に強調点が置かれているのかを考える必要がある。ボウカムは Moule の、「ヨハネによる福音書においては、パウロ書簡に観られるような『信仰共同体』の理解以上に、イエスと個々の信仰者との『個別的関係性

(individualism)』に強調が置かれている」³とする主張を独自の論拠を加えてさらに展開する。ボウカムは 2 つのタイプの語りに注目する。1 つは格言的 (aphoristic sayings) 発話と、もう 1 つは対話である。いずれもイエスと個 (信仰者) との親密で永続的な関係性を強調している。例えば、6 章 56 節の、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにとどまり、わたしもその人のうちにとどまる」では、イエスのいのちに個々の信仰者が参与するという意味での親密な関係性が表わされている。次に＜対話 (dialogue)＞であるが、それら是一对一の対話でイエスとの個別的な関係性を有する内容となっている。それぞれの登場人物のイエスに対する応答が多様であるだけでなく、彼らに対するイエスの応じ方も多様で個別的である点に注目する必要がある。

往々にして、様々な学説 (研究仮説) を追って行くうちに、聖書テキストそのものの読解が疎かになるということがある。また、聖書外資料に重点を置き過ぎると、肝心の聖書テキストの文脈を読み誤る場合もある。ボウカムの研究は、そういった学術研究の陥り易い問題に警鐘を鳴らしている。

本論文においては、改めてヨハネの福音書の文脈理解を大切にしつつ、NPP が強調する視点との関係性 (類似と相違、テーマの相対的位置 [前景と後景]) について考察してみたい。

1) 信仰といのち

ヨハネの福音書には、πίστις という単語は一度も現れないが⁴、πιστεύω の頻度は他の新約聖書の書と比べて圧倒的に高い (cf. マタイ 11 回、マルコ 14 回、ルカ 9 回、ヨハネ 98 回、ローマ 21 回、ガラテヤ 4 回、1 ヨハネ 9 回)。そしてその場合の＜信ずる対象 (πιστεύω εἰς〜 で表現)＞の殆どはイエス本人、もしくはイエスの存在と使命に関わる事柄 (しるし、ことば) である⁵。

³ Charles F. D. Moule, 'The Individualism of the Fourth Gospel,' 171-90.

⁴ ヨハネの手紙でも一度のみ (1 ヨハネ 5:4)。その場合、ἡ πίστις ἡμῶν とあるように、「キリストの真実」を意味しない。πιστός はヨハネの福音書 20:27 に一回出てくるが、その意味は、「不信仰 (ἄπιστος)」に対する「信仰」である。

⁵ 他に、「モーセ」(5:46、47)、「御父」(12:44、14:1) もある。

² R. Bauckham, 'Individualism,' in *Gospel of Glory: Major Themes in Johannine Theology* (Baker, 2015), 19; 当論文の要約は以下を参照のこと：遠藤勝信「栄光の福音書—ヨハネ神学の中心主題」『人生を聖書と共に』(教文館、2016 年)、100-11 頁

ヨハネの福音書には、イエスの＜神性 ('divine identity')＞と＜神的役割 ('divine role')＞が端的に語られる＜キリスト論的言説 ('christological statement')＞と呼ばれる箇所がある（例えば、序文や 3:16-17 等）。その前後に、否定的応答 ('negative response') と積極的応答 ('positive response') とが並記されるのがヨハネの福音書の特徴である（cf. ヨハネ 1:10-13; 3:16-22; 6:66-69; 7:40-43）。

1章10節から11節では＜世を造られた方＞に対する＜世 (ὁ κόσμος)＞の拒絶について語られる。しかも ὁ κόσμος αὐτὸν οὐκ ἔγνω という語順は、拒絶の様を際立たせている。次の節では ὁ κόσμος は τὰ ἴδια (中性・複数を、新改訳は「くに」と意識) に、さらに οἱ ἴδιοι (男性・複数を、新改訳は「民」と意識) と言い換えられ、世 (ὁ κόσμος) →くに (τὰ ἴδια) →民 (οἱ ἴδιοι) と、否定は益々人格的様相を呈して行く。それとは対照的に、積極的応答を示す人々には＜神の子どもとなる特権＞が与えられるとの福音が語られる。その条件はその方を「受け入れる (*λαμβάνω)」こととされるが、それは「その方の名を信じること (πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ)」と言い直される。

3章16節から22節では「御子を信じる者 (πᾶς ὁ πιστεύων εἰς αὐτὸν) が、ひとりとして滅びることなく (μὴ ἀπόληται)、永遠のいのちを持つ (ἔχει ζωὴν αἰώνιον)」とされる。また、その信仰の応答 (受容と拒絶) によって、さばかれない者 (οὐ κρίνεται) とさばかれる者 (ἥδη κέκριται) とが分けられる (3:18)。「永遠のいのちを持つ (*ἔχω)」とは、「滅びないこと」と同義である⁶。6章27節において、「滅びる (*ἀπόλλυμι)」とは「終わりの日のよみがえり」の対語であり終末のさばきを意味する。それは当該文脈において、＜ほろび＞と＜さばき＞が同時に語られていることと一致する。そして、イエスに対する信仰はその終末的さばきを現在化するものとして語られている。

ヨハネの福音書5章24節でも、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者 (ὁ τὸν λόγον μου ἀκούων καὶ πιστεύων τῷ πέμψαντί με) は、永遠のいのちを持ち (ἔχει ζωὴν αἰώνιον)、さばきに会うことがなく

(εἰς κρίσιν οὐκ ἔρχεται)、死からいのちに移っている (μεταβέβηκεν ἐκ τοῦ θανάτου εἰς τὴν ζωὴν)」と語られる。ここでも、「永遠のいのちを持つこと」と、「さばきを免れること」は同義であり、さらには「死からいのちへ移っている (完了時制)」という立場の移行が既に起こっているとされる。5章29節に「善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受ける」とあるが、それは当時のユダヤ人が一般に抱いていた終末思想を反映している⁷。5章21節の「父が死人を生かし、いのちをお与えになる」、また26節の「父がご自分のうちにいのちを持っておられる」という言説も同様である。特に29節は、終末のさばきにおける神の絶対的権能を強調するものだが、前後の文脈において、そのさばきを免れる唯一の道が、御父がさばきといのちの権能を委ねた御子への信仰にある (5:24, 39-40) とイエスは主張しているのである。終末のさばきに関して、＜いま＞と＜やがて＞という二つの側面があることは N.T.ライトの義認論が強調する一つの点だが、ヨハネは明らかに前者 (＜いま＞) を focus し、御父から御子へと委譲された終末のさばきの権能を強調し、それを前景として描いている。それは、ヨハネの手紙第一2章1節後半から2節において、終わりの日のさばきを免れる特権が神の子らに与えられているとする説明とも共鳴する。

「もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方 (*παράκλητος) がいます。義なるイエス・キリストです。この方こそ、私たちの罪のための、私たちの罪だけでなく、世全体のための (περὶ ὅλου τοῦ κόσμου) なだめの供え物 (ἱλασμός) です。」

ヨハネの福音書17章3節にある＜永遠のいのち＞は、＜神を知ること＞、つまり＜神との親密な交わり＞を表していると屢々論じられるが⁸、論者はそれとは異なる見解を持っている⁹。ギリシア語本文は以下のとおり。

⁷ ヨハネ11章24節にも、マルタの口に当時のユダヤ人の終末思想が置かれている。

⁸ 例えば B. Lindars (*The Gospel of John* [NCBC; London: Eerdmans, 1972], 519-20) は、ヨハネは「知識」を「関係性」として理解したと説明し、E. Haenchen (*A*

⁶ ヨハネ10章28節を参照のこと。

αὕτη δέ ἐστιν ἡ αἰώνιος ζωὴ
 ἵνα γινώσκωσιν σὲ τὸν μόνον ἀληθινὸν θεόν
 καὶ
 ὃν ἀπέστειλας Ἰησοῦν Χριστόν

当該節は指示代名詞 οὗτος (本文では、ἡ αἰώνιος ζωὴ の性に従って αὕτη) を冠する構文で記されており、ἵνα に導かれる節を αὕτη が受けて、叙述名詞 ἡ αἰώνιος ζωὴ の主語となっている。この場合の ἵνα は節を導くだけの機能を果しており、それ以上の機能 (例えば、目的や理由等) はない¹⁰。英訳、独訳を一覧すると、いずれも αὕτη とそれが指し示す ἵνα 節を主部とし、ἡ αἰώνιος ζωὴ をその叙述名詞と理解していることが分かる¹¹。一方、邦訳ではいずれも＜永遠のいのち＞が先に訳出され、むしろ ἵνα 節が＜永遠のいのち＞の述部のようにして翻訳されている。それは εἰμί によって連結される主語 (subject) と叙述名詞 (predicate noun) を同等 (S = PN: 'convertible

proposition') と判断したとも¹²、翻訳上の配慮のもとに、ἡ αἰώνιος ζωὴ を文の主語と判断したとも考えられる。指示代名詞による構文 αὕτη + ἐστιν + PN + ἵνα or ὅτι 節) を英語の構文 'This is PN that ~' に置き換え得ても、邦訳では文のバランス (主部の軽量化) を考え、述語名詞を最初に訳そうと配慮が働くからであろう。しかし、主語と述語名詞との位置が変わることで、文の意味に変化がないかを検証する必要がある。

二つの名詞が εἰμί 動詞によって連結された場合、叙述名詞の意味が、主語名詞が帰属する範疇よりも広いのが一般的である。しかし、叙述名詞が文脈において何らかの限定を受けることで等位となる場合がある。その場合の主語と叙述名詞との関係は convertible である。それは指示代名詞 οὗτος と叙述名詞の関係にも適用され、οὗτος 及びそれが受ける ἵνα clause もしくは ὅτι clause の叙述名詞に対する関係は以下の通りとなる。

οὗτος (ἵνα clause / ὅτι clause) ≤ Predicate Nominative ¹³

そして、S = PN、すなわち convertible proposition としての理解が可能となるかは、叙述名詞が限定詞を伴うか、もしくはテキストの文脈に、同様の限定機能が観られるかによって判断されるということであり、それは翻訳者が文脈を如何に判断するかによるということである。

では、当該箇所文脈はどうだろう。ヨハネの福音書 17 章 3 節の主語は αὕτη であり、それは ἵνα 節を指している。一方、叙述名詞は「永遠のいのち (ἡ αἰώνιος ζωὴ)」だが、特にその概念を規定するものはない。強いて言うなら、それは前節に言及された＜御父が御子に委ねた権威＞と関係があり、具体的に「御子が御父から委ねられたすべての者に与える永遠のいのち (πάν

Commentary on the Gospel of John, vol. 2 [Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1984 (orig. 1980)], 151) もその「知識」を、信仰者の、神 (またキリスト) への献身、神との交わりと理解する。C. Keener (*The Gospel of John: A Commentary*, vol. 2 [Peabody: Hendrickson, 2003], 1054) は、永遠のいのちには、父なる神と御子なるキリストとの親密な関係性 ('intimate relationship') の概念が含まれると理解している。同様の解釈は、S. シュルツ (*Das Evangelium nach Johannes* [Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972] 『NTD 新約聖書注解』NTD 新約聖書注解刊行会, 409 頁) にも、徳善義和の注解にも観られる。

⁹ 詳しくは拙著「ヨハネ 17 章 3 節の談話的再考—主語・述語名詞の関係と解釈を中心に」『新約学研究』40 号 23-39 頁 (2012 年) を参照のこと。

¹⁰ Wallace はそれを 'apposition' と理解 (D. Wallace, *Greek Grammar Beyond the Basics* [Grand Rapids: Eerdmans, 1996], 475)。Cf. ヨハネ 6:39, 40; I ヨハネ 3:11, 23; 5:5; II ヨハネ 6 (ヨハネ 3:19; I ヨハネ 1:5; 5:9, 11, 14 では ἵνα の代りに ὅτι が用いられている)。同様の表現は、ルカ 8:11 と II コリント 1:12 の二例のみである。ルカの方では、指示代名詞が受けているのは独立した文であり、II コリントでは、ἵνα の代りに ὅτι が用いられている。

¹¹ 英訳では、'This is eternal life, that~' (KJV, NKJV, REV, NRSV, NIV, ESV, NASB, etc.)、独訳では、'Das (Dies) ist Aber das ewige Leben, daß~' (LB, TB, EB, etc.) と訳される。

¹² 主語と叙述名詞との関係には、叙述名詞が主語よりも広い範疇 (又は状態) を表わす場合 (S < PN: 'subset proposition') があることを考慮すべきである。Wallace, 40-42 を見よ。

¹³ D. Wallace, *Greek Grammar Beyond the Basics: An Exegetical Syntax of the New Testament* (1996), 40-44, 475-76.